

論 文

分析心理学による夢の感情についての理論的検討

京都大学大学院教育学研究科

博士後期課程1回生 吉岡 佑衣

A Theoretical Examination of Dream Emotions by Analytical Psychology

YOSHIOKA, Yui

キーワード：夢分析, 感情, 分析心理学

Key words : Dream analysis, Emotions, Analytical psychology

1. 問題と目的

夢分析は心理療法の主要な技法のひとつであり、「無意識への王道」(Freud, 1900/2007 ; 2011)と言われるように心の内的な様相を知るために有用なツールのひとつである。夢は多くの学派で用いられているが、中でも分析心理学では「夢分析は分析治療の中心問題」(Jung, 1984/2001)と、分析のツールとして最も重視されていると言っても過言ではない。分析心理学における夢の着目点としては内容、象徴、構造など様々な点があるが、本論文では感情に焦点を当てる。夢分析において感情は学派を問わず重視されている点であり(粉川, 2017)、Jung(1961/2016)も「無意識の内容に極めて大きな重要性を与えているのは、まさにそれらの情動性」と述べている。よって、夢においても、感情面がその重要性に対して大きな役割を担っていることが予想される。

臨床場面で夢見手が夢を想起して語る時、セラピストが語られた夢を聞くとき、双方から着目されやすいのは「怖い」「不気味」といった素朴な感情的要素ではないだろうか。Hillman(1967/1990)は「夢の感情的色合いや、目覚めたときの気分や夢の中での夢を見た人の情緒的反応、例えば、喜びとか恐怖とか驚きとかに、特に注意する」と夢の感情面への着目の重要性を述べている。しかし、夢の感情の生起要因や、感情への着目が分析心理学観点においてどのように活かされるのかについて整理された論文は見当たらない。分析心理学的立場から夢を治療に活かす際、夢に付随する感情にはどのような意味があるかについて検討することには意義があると思われる。よって、本論文では分析心理学に依拠して理論的検討を行い、夢の感情との関連性を検討することを目的とする。

本論では、最初に分析心理学における心の構造や概念について、特に夢に関わる部分を中心に整理する。次に基礎的な夢理論を概観し、夢の感情の生起要因やその働きについて述べる。最後に、夢の感情の治療的意義を、理論的検討から得られた見解に基づき整理する。

2. 分析心理学における心の構造

夢についての検討に先立ち、分析心理学における心の構造について整理する。全ての理論を網羅的に扱うことはできないが、より基礎的な部分や、感情について理解する上で重要な概念である意識と無意識、元型、コンプレックスについて主に言及する。

(1) 心の基本構造

心の層として大きく意識と無意識が存在する。意識には自我が存在し、我々が意識的に外界に適応する様々なはたらきの中心的な存在を担っている。無意識について Jung(1928/1982)では、無意識の内部には抑圧された素材のほか、意識の手に届かなくなってしまういっさいの心的なものがあると述べている。Freud が無意識は幼少期の記憶や個人的な経験が抑圧された領域であると考えていたことに対して、Jung は意識以外のすべてのものを無意識の領域であると考えていた。また、Jung にとって無意識とは「不活性であるといっても決して休んでいるわけではない」(Jung, 1928/1982)のものであり、意識とは異なるものの無意識それ自体として活動するものである。すなわち、無意識は意識によって抑圧された心的内容が存在する領域というだけではなく、無意識もそれ自体として自律的な働きをする心の働きである。だからこそ、無意識は夢やファンタジーイメージ、象徴といった形で、独自の心的活動を行う。そして、意識と無意識の両者は相互に影響を及ぼしあう。代表的なものが無意識の補償作用であり、意識の態度が一面的に偏りすぎたり、意識が抑圧しているものが大きくなりすぎたりすると、無意識はそれを補うようなはたらきを症状や夢を媒体として行う。この補償的な相互作用は、心やその治療において重要な作用であり、Jung は「こころとは自己調整を行うシステム」(Jung, 1931/2016)と呼んでいる。すなわち、人の心には自己治癒のような、心自らが自らを調節する機能を有しているということであり、それが様々な心の働きの形であらわれている。

また、無意識には個人的な領域のみならず、集合的な領域も存在する。個人的無意識はあくまでも個人の心にある無意識の領域であるが、集合的無意識という概念は Freud との考えの違いが浮き彫りになるきっかけともなった Jung 独自の概念である。集合的無意識は普遍的無意識とも言われ、個人的なものを超えた非個人的なものであり、人類にとっての集合的な心の領域である。集合的無意識の内容は神話のモチーフや儀式、夢などにあらわれやすい。そして、集合的無意識の中に存在するものが元型である。元型とは人間の集合的無意識の中に存在する共通したプロトタイプのようなものであり、元型それ自体が存在するというよりも、仮説的な概念である。その種類としてはアニマやアニムス、ペルソナ、シャドウ、グレートマザー、セルフなどが挙げられる。ここではその全てを紹介することはしないが、例えばペルソナは仮面という意味であり個人が外界と接するときに仮面のように身に付ける態度や肩書のことである。シャドウはある個人が生きられていない側面、まさに影となるような暗い側面のことであり、グレートマザーは母親に関連する。このような人類にとって普遍的な元型は、ヌミノース²⁾な性質を有しており、激しい情動を引き起こすため、自我と元型との過度な同一化により現実検討力が低下するなどの危険な側面も有している。

(2) コンプレックスと人格化

コンプレックスは Jung の比較的初期の理論であり、言語連想実験から発見された。Jung は自身の心理学をコンプレックス心理学と呼んでいたこともあり(河合, 1967)、分析心理学の中で非常に重要な概念である。コンプレックスは「強い感情を伴うコンプレックス」(Jung,1934/1993)と呼ばれ、河合(1967)はコンプレックスについて「多くの心的内容が同一の感情によって一つのまとまりをかたちづくり、これに関係する外的な刺激が与えられると、その心的内容の一群が意識の制御をこえて活動する現象を認め、無意識内に存在して、何らかの感情によって結ばれている心的内容の集まり」と説明している。コンプレックスが発見されるきっかけとなった言語連想実験は被験者に対して 100 個の単語を提示し、「最初に思いついた言葉をできるだけ早く答えてください」と教示し、それぞれ連想する単語を答えさせ、答えた単語並びに反応に要した時間を記録する実験である。1 回連想が終わった後に、再度 100 個の単語を繰り返し、その時は 1 回目の反応と同じ単語を述べるように求める。一連の手続きは以上であり一見容易な実験のように思えるが、実際に行うとある特定の単語だけ著しく反応が遅れたり、再生できなかったり、何回も同じ単語を答えたりする。Jung(1910/1993)が例として挙げているのは、ある患者で「短い」という言葉が何度も繰り返されたが、それは患者の小さな身体つきによる自信の喪失によるものであり、「短い」という言葉は多くの辛い経験を意味していたという。そのような反応の遅れや再生に欠陥といった乱れが起こるのは、単語によって被験者のコンプレックスが刺激され、感情的な動きが生じるためであると考えられた。

コンプレックスの重要な特徴として、自律性を持つことが挙げられる。連想実験ではコンプレックスの自律的な働きにより意識的な統制が乱れ、反応にも乱れが生じるが、このような影響が出るのはコンプレックスが強い感情を伴うためであると考えられる。例えばある人物が過去に偶然犬に噛まれて怪我をした場合、犬という事象について恐怖や嫌悪という同一の感情を帯びたまとまりが形成される。その後、この人物は危害を加えないような可愛らしい子犬を見たとしても、恐怖感や嫌悪感が生じてきて子犬から逃げ出したり、「犬」という言葉を聞いただけで冷や汗が出たりするかもしれない。それは、頭では「たいていの犬は人にとって脅威ではない」と分かっているにもかかわらず、自律的なコンプレックスによって恐怖や嫌悪などの感情が生じてくるために、行動にまで影響を及ぼしているのである。そのようなコンプレックスの自律性は自我を脅かすことや、現実の生活に支障を及ぼすことが考えられる。

コンプレックスや元型は「人格化」されることが指摘されている。人格化とは、夢や空想の中でコンプレックスや元型が人格として夢や空想の中に現れる現象のことである(Jung, 1954/1982)。夢の中に現れてくるような人物や動物といった対象は、コンプレックスが対象の形をとって出現しているということである。コンプレックスは基本的に無意識に存在するため、普段は直接的にコンプレックスの存在を意識することは少ないと考えられる。しかし、夢などではコンプレックスが登場人物の形をとるため、人格化されたコンプレックスを通して、その人の無意識のありようを知ることが可能になる。個人的なコンプレックスのみならず、集合的・元型的なものが人格化されて出現することもあり、元型も同様に日常生活の中で直接出会うことはないが、夢では元型が人格化された形で出会うこともある。

3. 分析心理学における夢理論

続いて、分析心理学における夢理論について整理する。Jung は「夢分析は分析治療の中心問題です。というのも、これこそ無意識への道をひらく最も重要な手法だからです。」(Jung, 1984/2001)と夢を治療の中で非常に重視していた。その理由として「夢はあるがままの姿で、内的な真実と事実を表現します」(Jung, 1931/2016)と述べるように夢は意識の影響が及ばない睡眠中に見られるため、普段は表れない無意識的な心の様相まで描き出すことが挙げられる。覚醒時の、意識や自我の働きが強くなっているときにはあらわれにくい無意識内容や心の内的な様相も、夢ではイメージとして描き出される。そのために治療において夢を聞くことは、内的な様相を知る有力な手掛かりとなり、重視されてきたと考えられる。

夢には様々な人物や動物、物といった登場人物の形で、「対象」があらわれる。夢の中での自分、いわゆる夢自我は夢の中で対象と様々な関わりを持つことが多いだろう。そのような夢の中の対象に関する Jung の理解は特徴的であり、解釈方法には客体水準の解釈と主体水準の解釈という 2 つの水準が存在する(Jung, 1916/2016)。客体水準の解釈というのは、夢に出てきた人物を実際にいる人物として解釈するということである。例えば、夢見手の母が出てきた場合、それを単純に現実に存在する夢見手の母自身を表現していると考ええる。一般的にはこの客体水準の解釈の方が理解されやすいように思われるが、重要なのはもう一方の主体水準の解釈である。主体水準の解釈では、夢に出てきた人を現実の人物ではなく、あくまでも夢見手の心の中に存在するイメージが、ある人物や対象の姿をとって表現されていると解釈する。例えば、母親が出てきた場合も、それを現実の母親と解釈するのではなく、夢見手の中にある母親イメージや、個人的な母親に関するコンプレックス、さらには元型としての母といった、全て夢見手の心の中に存在するものとして解釈する。これは先に述べた、人格化の作用であると考えられ、人格化された対象とイメージの中で出会う機会が最も多いとも考えられるのが夢であろう。このような対象として表現される心の部分は、無意識のコンプレックスや自我にとって異質なもの、未だに統合されていない部分として表現されることも多い。例えば、夢見手が苦手とするような人物像が出てきて、話しかけてくるような夢を見た場合、夢見手がしりぞけて生きてきたような心の部分と対話をし、向き合うことが必要であることが夢によって示されていると考えられるだろう。夢見手の、夢を見た今現在の状況として、コンプレックスや心の部分に向き合って統合を試みるのが夢見手にとって意味のある場合、分析家の助けを借りつつそのことに気づき、夢見手にとっての意味を考えることが有効であると考えられる。

これは、Jung が夢の最も重要な機能として挙げている「補償」の概念とも深く関係する。先には無意識が意識に対して補償的に働くことを述べたが、夢にも無意識的な心の働きとしての補償作用がみられる。補償機能とは「夢とはその時の意識の状況に対して補償的に振る舞うもの」(Jung, 1931/2016)と定義されており、言い換えると意識の状態に対して足りないものを補ったり、過度になっているものを戒めたり、意識に対してバランスを取ろうとする心の働きであると考えられる。Jung(1945/2016)では主なものとして 3 つの補償の在り方が挙げられており、「生の状況に対する意識の態度が相当な程度で一面的な場合、夢はそれとは反対の側に立つ。意識が『中道』に比較的近い立場をとる時、夢はバリエーションで満足する。意識の立場が『正しい』(適切な)時には、夢は意識の傾向と一致し、同時にそれを強調するが、それでもその際に夢特有の自律性を失うことはない。」とされている。夢の補償は意識と全く反対

のものを補おうとしているわけではなく、その作用は夢見手の意識やその時の状況に応じて、それぞれの夢に固有のものであると考えられる。実際の夢では対象が補償機能に果たす役割が大きいように思われる。夢見手が苦手とする人物が話しかけてくるという例を挙げたが、これは「苦手とする人物」という対象のイメージを媒介として補償的に作用しているとも考えられる。このような対象を夢自我にどのように統合するかが問題となることは先にも述べたが、心の機能として重要であるだろう。

実際の夢の解釈方法については、まず夢見手自身の夢を見たときの意識の状況や夢見手自身のありようを知ることが必要である。なぜなら、それぞれの夢見手にとって夢に出てくる対象の意味合いは異なるし、夢を見たタイミングによっても異なるからである。Jung(1931/2016)「夢によって補償されているのはどのような意識的態度だろうか」と問うことを勧めているように、夢見手にとっての夢の意味を知るためには、心の状況をきちんと把握しておくことが必要である。それは夢見手の心的な状態のみならず、実際に置かれている外的な状況や、夢見手にとって重要な問題など、収集すべき情報は多岐にわたると考えられる。

また、夢は象徴に満ちており、一見してもその意味が分かりにくいことが多い。その点に関して Jung は、「私たちの夜の側面からやって来る謎めいたメッセージを正しく読み解くための機知を欠いているのは、明らかに私たちの方なのです。」(Jung, 1931/2016)としている。そのような象徴に満ちた夢を理解する方法として「拡充法」が用いられる。Jung(1987/1992)によると、この拡充法は夢のイメージからジグザク上に遠ざかってどこかに行きつく自由連想とは反対に、「この技法とは逆に、私は最初の表象 X にとどまる。この方法を『第一図式への還元』に対して、拡充(amplification)と呼ぶ。その際私は、非常に単純な次の原理を出発点としている。つまり、自分は夢について何も分かっていない。夢の意味するところも知らない。夢のイメージがどのようにして各人の心に埋め込まれているのか考えもつかない、ということである。私は、手もとにあるイメージを目に見えるようになるまで拡充する。」(Jung, 1987/1992)と、ある夢のイメージにとどまりつつ、夢見手の連想を問う方法である。その方法は、夢のイメージに注意を集中して、夢見手への質問は「X について何か思い浮かびますか？それについてどう考えますか？他に X について、何を思い浮かびますか？」というように、あくまでも夢のイメージ X にとどまる。

4. 分析心理学における夢の感情

分析心理学における心の構造と、夢の理論について概観してきたが、次に夢の感情の意義について理論的に検討を行う。それに先だち、分析心理学で「感情」はどのように定義されているのかについて整理する。Jung(1921/1987)は、『タイプ論』において、感情を思考、感覚、直観と並んで心の4つの基本機能のひとつと捉えている。その定義として、「感情内容とは第一に自我と与えられた内容との間に生じる活動であり、しかもその内容に対して受け容れるか拒むか(「快」か「不快」か)という意味で、一定の価値を付与する活動である。」(Jung, 1921/1987)と、感情の価値を付与する機能を挙げている。しかし、感情はその時の意識内容や感覚とは別個に「気分」として表れることもあり、この場合の感情は無意識内容からもよく生じうるとされている。また、価値づけも受け入れるか拒むかという意味であることから、感情とは、さしあたっていかなる点においても外的刺激から独立しうる完全に主観的な活動である。これらからも、感情とは非常に主観的な性質を持つものであり、しかもそれが内容に対して受け容

れるか拒むかという点で、その人自身の特性が如実に表れてくるものだと考えられる。これは、全く同じものや事象に対しても個々人が嫌悪や好意など異なった感情を抱くことからよく分かるだろう。

では、夢の感情はどのように生起するのだろうか。これはコンプレックス(Jung, 1913/1993)との関連が深いと考えられる。まず、夢では「深い分析をしなくとも夢には、連想実験においてもその存在が確認することができるのと同じ葛藤とコンプレックスが見出されます」Jung(1938/1989)と、コンプレックスがあらわれやすい。Jung(1909/2016)は夢の感情とコンプレックスの関連について次のように説明する。「情動的係数を持った連想のコンプレックス」のありようによって「心的活動のあらゆる産物は何よりもまず非常に強力な『布置する』影響力に左右される」。夢であれば夢を見たときのコンプレックスの布置のありようによって、夢がどのようなものになるかが影響されるということである。それゆえに「夢の中で、私たちは情動的な構成要素と出会っている」と説明されている。例えばある人の中で母親に関するコンプレックスが非常に問題となっており、心理的に影響を及ぼしている場合、母親や母親に関するイメージが夢にあらわれやすい。そして母親コンプレックス自体が情動的要素に満ちたものであるため、母親コンプレックスにまつわる情動的要素と出会うことになる。すなわち、心的活動の産物である夢はコンプレックスに影響されるが、それぞれのコンプレックスには情動的な要素が付随しており、情動を喚起しやすいコンプレックスが影響を及ぼしているために、夢では情動的要素が生起しやすいと考えられる。

実際の夢でコンプレックスは、夢の中の人物や動物、状況、ストーリーなど様々な形であらわれると考えられる。また、夢自我も「潜在的な自我の像」(河合, 1976)であり、自我も「自我コンプレックス」(Jung, 1968/1976)と言われることから、コンプレックスとして捉えることができる。粉川(2018)は夢の中の他者、物、場所がクライアントの心理的テーマの展開に果たす役割を考察し、それらはいずれも夢見手の心理的テーマを表わしており、夢自我と対象の関係の在り方やイメージの変容過程を辿ることが有用であることを指摘している。よって、コンプレックスの影響によって感情が生起する場合にも、様々なパターンがあるだろう。直接的にコンプレックスが人格化し、対象の形であらわれて夢自我と何らかの関わりをする中で感情が生起する場合(例. 夢の中で対象に追いかけられる)が最も顕著だと思われる。しかし、直接の関わりがなくとも「イメージとして現れることで、夢見手の心理的テーマや問題をより明確に突きつける役割」(粉川, 2018)もあるように、イメージとして出現した対象から感情が喚起される場合もある。また、夢の場面や設定それ自体が夢見手のコンプレックスと深く関わっており、夢の雰囲気(例. 不気味さ)という形で感情が生起することもあるだろう。このようにコンプレックスとそれに関する感情の現れ方には多くのバリエーションがあり、それぞれの個別性を重視する必要があるが、夢の対象とそれを通じた感情は夢の補償の作用とも関わりが非常に深いものであると考えられる。直接的に対象と関わることで影響を受けることや、対象のイメージをもって心理的テーマや問題を突きつけられること、場所や設定の形で自らの置かれている状況や心理的状态が間接的であっても表現されていることなど様々なパターンがあるが、いずれの場合も対象と関わって感情が喚起されているのは夢自我であり、夢の中で感情を含めた補償的作用の影響を受けていると考えられる。

このように夢の感情の生起においてはコンプレックスとの関わりが非常に深いことが考えられるが、ここでのコンプレックスは個人的なものだけに限らない。Jung(1909/2016)も「問題となっているのは集

合的情動、すなわち典型的な情動的状况」だというように強い情動をもたらす元型的やそれに関する状況が問題となる夢も存在することを指摘しているが、河合(1967)に示されている夢の例がわかりやすいと思われる。河合(1967)では不登校の児童の夢を例に挙げ、元型的要素について説明している。中学2年生の学校恐怖症児が見た夢では、大きい肉の渦があり、それに巻き込まれそうになり、恐ろしくなって目が覚める場面がある。夢見手である少年は、この夢について何も思いつくものがないが、河合によるとそのような場合、夢の内容は意識からはるかに遠い、深い集合的無意識の層から浮かび上がってきたと考えられている。例えばこの夢であれば、肉の渦はグレートマザー(太母)の元型が渦巻によって象徴的に表現されたものであり、それゆえに肉の渦のイメージは凄まじく、恐ろしいものとして体験されたと考えられている。このように夢を見た個人にとっては非常に不可解な夢であるにも関わらず、激しい情動が喚起される夢については集合的な要素が強いものであると考えるべきであろう。尚、感情的な夢には反応夢という場合もあることについても記しておきたい。ショッキングな出来事に対する反応夢も存在し、「特定の客観的な過程が心的トラウマをもたらしたときの夢、例えば戦争ではこのような真正の反応夢が予想される」(Jung, 1916/2016)ように、心的に処理しきれない情動的体験を夢の中で反復している場合もあるため、全ての夢の感情について夢見手にとって意味のあるものとして捉えることは避けるべきである。

5. 夢の感情の治療的意義

(1) 夢の主観的意味の理解

次に、夢の感情の治療的意義にはどのようなものがあるかについて論じる。1つ目に、夢見手にとっての夢の主観的意味の理解に有用であることを挙げるが、まずは Jung による感情の定義について再度言及したい。「感情内容とは第一に自我と与えられた内容との間に生じる活動であり、しかもその内容に対して受け容れるか拒むか(「快」か「不快」か)という意味で、一定の価値を付与する活動である」(Jung, 1921/1987)。これを夢の文脈で考えると、与えられた内容とは、夢での対象や状況などのあらゆる内容であり、自我とは夢の中では夢自我であると考えられる。すると、夢の感情内容とは、夢の内容と夢自我との間で生じる活動であり、夢の内容に対して一定の価値を付与する活動であると言い換えることができる。すなわち、夢で対象に対して生じる「嫌悪」、「恐怖」、「好意」などの様々な感情は、夢自我にとっての対象それ自体の価値判断を如実にあらわしていると考えられる。例えば、対象に対して激しい嫌悪の感情が喚起された場合、それは自我にとって非常に受け入れがたい心的な内容であり、異質性が強いものであろう。先に夢の対象はあるイメージをとって夢自我に働きかけており、対象は夢自我にとって統合の必要がある心的内容をあらわしていることについて述べ、それは補償の作用のひとつであると考えられた。そのことを鑑みると、夢で対象に対して付与される感情という価値判断の在りようは非常に重要なものであろう。なぜなら、対象が夢見手の自我や意識にとって、一体どのような意味を持ち、対象をどのように統合していくべきなのかを知る有力な手がかりとなるからだ。感情は主観的な性質を持つため、たとえ同一の対象があらわれる夢を見たとしても、それぞれの夢見手によって対象に対して付与される感情というのは全く異なることが予想され、夢見手の心理的な様相を知ることが可能になると思われる。

例えば、分析心理学派の分析家であり夢に対しては内在的にアプローチすることを重視するギーゲリッヒの夢セミナー(Giegerich, 2013)で村林が発表した 20 代男性の事例の夢では、夢自我は夢の中で女性が近づいてきたときに不合理なほどに強い恐怖を感じている。ここでは夢の恐怖によって、実は夢見手が女性に関して特別な問題を抱えており、女性との出会いや接触が恐ろしく感じており恐怖を認めることこそが必要であるということが議論されている。そのような心理的背景は、夢や夢の恐怖と言った手がかりがあったからこそ判明したことだろう。また、直接的に夢自我に対象が関わる夢のみならず、夢での状況に対して夢自我が抱く感情についても、夢見手のありようを知る手がかりとなっている事例がある。梅村による「自分の問題を直視できない」という 40 代の女性の事例の夢では、各人の持ち物を置く棚が場所によって広さが異なることに対して不公平が生じているという状況に対して夢自我は「憤慨し、子どもじみた感情にはまり込んでしまっているように思えます」と Giegerich によってコメントされている。ここでは、夢自我が不公平という状況に対して合理的ではない形で不満・怒りを抱えていることが子どもじみており、かつ神経症的だということが明らかにされている。よって、実際の臨床場面でも夢の内容を聞くだけでなく、夢の中でどのような感情が生じたか、それはどのような要因によって生じたのかについて詳しく聞き取りを行うことが夢見手の心的世界の理解にとって有用であると考えられる。

(2) 感情によるインパクトの作用

2 つ目に、夢は感情を伴うことによって夢見手にとってインパクトを持ち、治療的な効果を及ぼしやすくなることが考えられる。Jung(1961/2016)は「夢などの感情の強さは心的生活の中でそれらのイメージに特別な力を与える」や「無意識の内容に極めて大きな重要性を与えているのは、まさにそれらの情動性」と述べており、夢が感情を帯びることによって、夢のイメージが生き生きとした、心的エネルギーを有するものになると考えられる。もし夢で全く感情が喚起されないとすると、夢のイメージはただの映像と変わりなく、それが心的に影響を及ぼすことは考えにくい。そもそも夢というものは、起床直後は覚えていたとしても、大多数の人にとっては日常生活を送っているうちに忘れてしまうような存在であろう。そのような夢が夢見手に印象づけられ、インパクトを持って記憶されるためにも、夢の感情が必要とされると考えられる。また、臨床場面でも、夢に付随する感情によって、夢を聞く分析家の中でも夢のイメージが生き生きと体験され、夢のイメージを両者の間で共有しやすいという作用が考えられる。

さらに、感情には夢見手が意識的に夢と向き合うという作用が考えられる。Jung(1961/2016)は我々の内省的な意識とは強烈な情動的衝突と、悲惨なものであることも多いその結末から生じたと考え、何らかの無意識的・本能的な行為によって生じる後悔などの感情について「人々の目を覚まし、自らの行為に目を向けるために、これと同じような情動的経験のショックが必要になることは少なくない」と述べている。夢についても、無意識の補償的メッセージに目を向け、夢について意識的に考えるためには、情動的・感情的なショックが必要となる可能性がある。すなわち、夢で強い感情が喚起されることは、夢見手にとって夢のメッセージに目を向けることにも繋がる。例えば恐怖を感じさせるような対象に追いかけて夢で怖い思いをした場合、恐怖という強烈な感情が喚起されることで夢は非常に印象深い

ものとなり、夢での対象の意味は何か、なぜ自分は追いかけていたのかといった、なぜあれほど怖かったのかといった、夢を通して自らについて振り返る行為が可能になると考えられる。よって、夢の補償作用が活かされるために、感情によるインパクトが必要となる場合がある。牧(2009)による不安夢についての研究でも、夢の中の恐怖には自己の不安に関わることを可能にする側面があることが示唆されている。これらから、インパクトを伴った夢の感情を通して、夢の対象や夢そのものと意識的に向き合い、夢から何らかの洞察や治療的影響を受け取ることが可能になると考えられる。また、夢を聞いたセラピストが夢の感情に対して何らかの反応を行うことも有用だろう。夢見手自身が漠然と夢の怖さなどの感情に気づいていたとしても、セラピストから感情を映し返されることによって、改めて自らの夢の感情的インパクトに直面し、夢について考えるきっかけになることも考えられる。

(3) 夢見手の感情の把握

3つ目に、夢では夢見手のありのままの感情が表現されやすいことが考えられる。日中は様々な感情が生じたとしても意識によって抑圧される場合も多い。例えば職場で、ある夢見手にとって「影」となるような特定の同僚に対して激しい嫌悪感を抱いたとしても、あからさまに嫌悪を表出することは職場の人間関係や業務への影響を鑑みると不適切だと考えられた場合、意識の働きによって嫌悪という感情は抑えつけられ、表面上は嫌悪感をやり過ぎながら仲が良いように振る舞うようなこともあるだろう。そのような日常的な意識の統制があるときは体験されづらく、表現されない感情も、夢の中では劇的に表現される可能性がある。河合(1967)で、実生活において極端に感情表現が少ない女性の夢で、それと著しい対象をなして強烈なイメージと情動が現れている事例が紹介されている。この事例に関連して、我々がその日にあった出来事のうちに、その意義やそれに伴う感情を十分に認識し、体験しないで終わったと思われることが夢に生じることが多い事実もあると河合は述べる。夢は意識の統制が効かないことから、意識的には抑圧を試みた感情も夢では劇的に表現されることがあり、これは夢を用いることの大きな意義であるとも考えられる。臨床場面でも、先の例の嫌悪感を抱く同僚に関する現実的な話では、「人のことを悪く言ってはいけない」などの思いから嫌悪感は語られなかったとしても、夢では同僚という対象が夢見手にとって嫌悪感を抱かせるような姿をとって現れたりすることで、セラピストから見ても嫌悪感が一目瞭然ということが考えられる。他に、対象から何かしら嫌な行為をされて、激しい嫌悪の感情が喚起されることがあると考えられる。特に、意識的には情緒的な面との接触が乏しく感情が掴みにくいクライアントや、セラピストに対しても過剰適応気味に振る舞うクライアントなどに対して、夢を通して感情体験を知ることは有用であると思われる。

6. まとめ

本論では、臨床場面で着目点として経験的に言及されてきた夢の感情について、分析心理学の観点から検討を行った。その結果、感情が生起する主要な要因としてのコンプレックスとの関わりが示唆された。そして、夢の中で表現されるコンプレックスには補償的な作用があることから、感情は補償的な意味でも重要であることが提示された。ここから、感情に着目する臨床的な意義として夢見手にとっての夢の主観的意味の理解に有用であることや、夢は感情を伴うことによって夢見手にとってインパクトを

持ち、治療的な効果を及ぼしやすくなることが挙げられた。また、セラピストのスタンスとしては感情面についても内在的に聞き取りを行うことや、夢によって伝えられた感情をセラピストの反応としてクライアントに映し返すことが可能性として考えられた。最後に、夢見手のありのままの感情が表現されやすいという点で、夢を用いることの意義が述べられた。

本論文で提示した臨床的意義は、夢分析ではセラピストによって感覚的に用いられてきたことだと思われる。しかし、改めて理論的な面からも検討し、整理して提示できたことには意義があると思われる。最後に本論文の限界として、実際の臨床場面でのやり取り等に関する詳細な検討はできなかったことや、臨床事例は提示できなかったことがある。本論ではコンプレックスや補償を中心に論を進めたが、他の視点もあるだろう。これらの点については今後の課題としたい。

引用文献

- Freud, S. (1900). Die Traumdeutung. Gesammelte Werke. Main: Fisher. 新宮一成 (訳) (2007; 2011). フロイト全集 4; 5. 岩波書店.
- Giegerich, W. ・河合俊雄(2013). 河合俊雄・田中康裕 (編) ギーゲリッヒ 夢セミナー. 創元社.
- Hillman, J. (1967). INSEARCH : Psychology and Religion. 樋口和彦・武田憲道 (訳) (1990). 内的世界への探求—心理学と宗教—. 創元社.
- Jung, C. G. (1909). L'analyse des rêves. L'année psychologique. 横山博 (監訳) 大塚紳一郎 (訳) (2016). 夢の分析 夢分析論. みすず書房. 117-129.
- Jung, C. G. (1910). Die Assoziationsmethode . 林道義 (訳) (1993). 連想実験の方法 連想実験. みすず書房. 3-49.
- Jung, C. G. (1913). Ein kurzer überblick über die Komplexlehre. 林道義 (訳) (1993). コンプレックス概論 連想実験. 205-216.
- Jung, C. G. (1916). Allgemeine Gesichtspunkte zur Psychologie des Traumes. Collected Papers on Analytical Psychology. 横山博 (監訳) 大塚紳一郎 (訳) (2016). 夢心理学概論 夢分析論. みすず書房. 35-93.
- Jung, C. G. (1921). Psychologische Typen. 林道義 (訳) (1987). タイプ論. みすず書房.
- Jung, C. G. (1928). "Die Beziehungen zwischen dem Ich und dem Unbewußten", Gesammelte Werke, Bd.7, Olten: Walter-Verlag 1981. 野田倬 (訳) (1982). 自我と無意識の関係. 人文書院.
- Jung, C. G. (1931). Die praktische Verwendbarkeit der Traumanalyse. 横山博 (監訳) 大塚紳一郎 (訳) (2016). 夢分析の臨床的使用の可能性 夢分析論. みすず書房. 3-33.
- Jung, C. G. (1934). Allgemeines zur Komplextheorie. 林道義 (訳) (1993). コンプレックス総論 連想実験. みすず書房. 217-241.
- Jung, C. G. (1938). Psychology and Religion. 村本詔司 (訳) (1989). 心理学と宗教(ユング・コレクション 3). 人文書院.
- Jung, C. G. (1945). Vom Wesen der Träume. 横山博 (監訳) 大塚紳一郎 (訳) (2016). 夢の本質について 夢分析論. みすず書房. 95-116.

- Jung, C. G. (1954). *Von den Wurzeln des Bewußtseins*. Rascher Verlag, Zürich, *The Concept of the Collective Unconscious, 1936/1937*, Journal of St.Bartholomew's Hospital, London. 林道義 (訳) (1982). 元型論. 紀伊國屋書店.
- Jung, C. G. (1961). *Symbols and the interpretation of dreams*. 横山博 (監訳) 大塚紳一郎 (訳) (2016). 象徴と夢解釈 夢分析論. みすず書房. 143-251.
- Jung, C. G. (1968). *Analytical Psychology: Its Theory and Practice*. 小川捷之 (訳) (1976). 分析心理学. みすず書房.
- Jung, C. G. (1984). *Dream Analysis*. Olten: Walter-Verlag. 入江良平・細井直子 (訳)(2001/2002). 夢分析 I・II. 人文書院.
- Jung, C. G. (1987). *Kinderträume*. Olten; Walter-Verlag. 氏原寛・李敏子・青木真理・皆藤章・吉川真理 (訳) (1992). 子どもの夢. 人文書院.
- 河合隼雄(1967). ユング心理学入門. 培風館.
- 河合隼雄(1976). 夢の中の「私」. 理想, **516**, 65-80.
- 粉川尚枝(2017). 心理臨床場面における夢の用いられ方—諸学派の理論の比較から. 京都大学大学院教育学研究科紀要, **63**, 41-53.
- 粉川尚枝(2018). 心理療法過程で生じる夢の中の他者, 物, 場所の役割. 京都大学大学院教育学研究科紀要, **64**, 193-205.
- 牧剛史(2009). 不安夢の臨床心理学的意義に関する研究. 佛教大学教育学部学会紀要, **8**, 35-44.
- Rudolf Otto (1917). *The Idea of the Holy*. 華園聰磨 (訳) (2005). 聖なるもの. 創元社.

ⁱ Jung(1921/1987)において、感情と情動を区別して定義している。しかし、感情と情動には連続性があり、情動とは目に見えるほどの神経性身体現象を伴うことが特徴である。本論文では、基本的には感情という用語を用いるが、引用の中で情動を用いることがある。

ⁱⁱ Jung(1938/1989)によると、力動的な存在もしくは作用で、意志の行為では引き起こせないものとされている。元は宗教学者の Otto が『聖なるもの』(1917)の中で述べた、聖なるものに対して戦慄し、圧倒されるような宗教的な深い感情体験のことである。Jung によると、元型的なものに触れた際も、このヌミノースな感情が生起する。